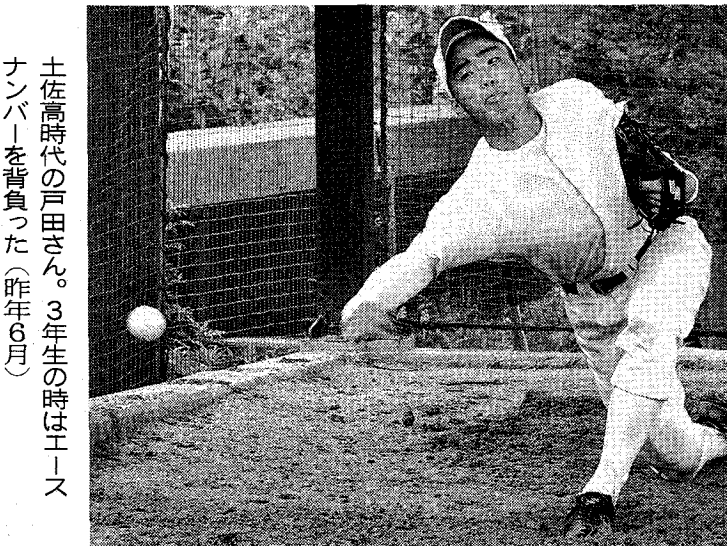
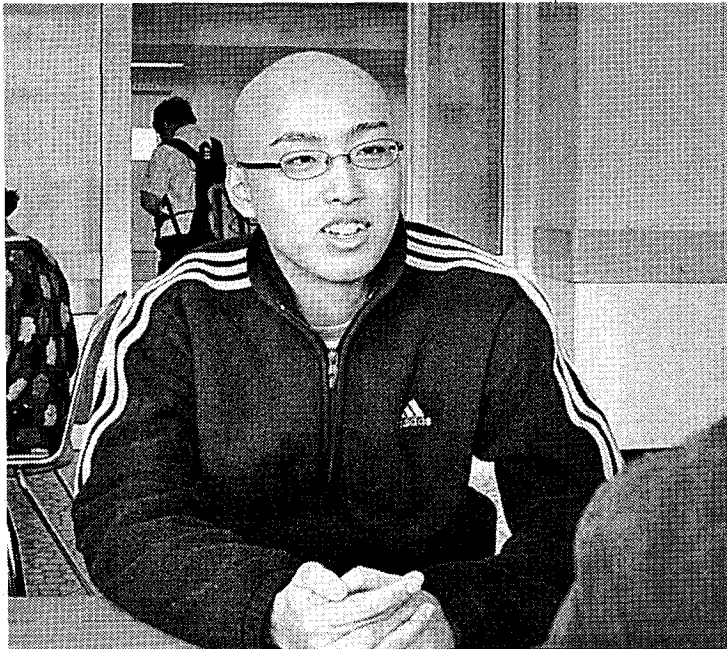


もう一度、野球やりたい

「自分とそして移植を待つ人たちのために、一人でも多くの人にドナー登録をしてほしい」と話す戸田浩司さん(南国市の高知大学医学部付属病院)



土佐高時代の戸田さん。3年生の時はエースナンバーを背負った(昨年6月)

「バンク登録を」仲間ら呼び掛け

骨髄バンクの協力連絡先は▽献血ルームハートピアやまもも(高知市本町二丁目朝日生命高知本ビル二階、088・822・5454)▽財団法人骨髄移植推進財団(0120・445・445)▽県内各保健所

「(骨髄移植に)リスクがあることは知っています。もしかしら後遺症が残るかもしれない。でも(移植を)やってみないとわからない。もし治ればもう一度野球をやりたいです」

一筋の希望を求め、戸田さんは闘っている。

難病の土佐高元エース戸田さん

骨髄移植待つ

慢性活動性EBウイルス感染症という病気にかかった土佐高出身の高知大一回生が、一筋の光を求めて骨髄移植を模索している。移植にはHLA(白血球の血液型)の一致が必要だが、一致するのは数百人―数万人に一人。適合する型を見つければ、土佐高や高知大関係者を中心に今月から骨髄バンクの登録運動も始まった。移植した場合の生存率は50%。本人も周囲も、その可能性に懸けている。

高知市南宝永町の高知大学教育学部一回生、戸田浩司さん(21)。土佐中高時代は野球部に所属。高校時代は投手を務め、三年生だった昨年はエースナンバーを背負ってチームを引っ張った。

高知大入学後も硬式野球部に入り、活躍。将来は中学の国語の先生を目指している。戸田さんが突然の頭痛と微熱に悩まされたのはことし九月だった。それほど気にせず練習へも参加していたが、症状は悪化。連日四〇度

の高熱が続くようになり、慢性的活動性EBウイルス感染症と診断された。リンパ球にEBウイルスが感染する病気で、子どものころにかかれば軽い風邪のような症状で終わる。しかし一部の人はウイルスが異常に増殖して慢性化。成人でかかるケースはまれだが、肝臓など臓器不全や悪性リンパ腫などを併発すると、致命的になるといふ。原因は全く分かっていない。

十月末、高知大医学部付属入院して一カ月半。昼間はかなり楽になるが、夜はいつも四〇度近い高熱が出る。心臓を、戸田さんは淡々と話す。「夜になるとどうしてもマインスなことが考えてしまいます。夢の中でも考えてどうしよう、って。それ

で目が覚めるんです」入院した戸田さんは、抗がん剤による治療を開始。猛烈な吐き気と便秘、髪がすべて抜けるなら体力が残っているうちに考え、戸田さんは骨髄バンクに患者登録。自分に適合するHLAを持つドナーを探している。

しかし、HLAを構成する六つの要素が完全に一致するドナーはいなかった。五つが一致したHLAでも移植は可能だが、ただでさえ高いリスクがさらに高くなるという。戸田さんの思いは母校の土

佐高や高知大に伝わり、当時の担任や野球部の仲間から応援の動きが始まっている。

内容は、できるだけ多くの人に骨髄バンクへ登録してもらうこと。骨髄バンクを充実させることで、戸田さんに適合するドナーも見つけようという発想だ。

高知大では教員を含む各層で応援ムードが広がっており、相良祐輔学長は「長い闘病生活になると思うが、負けないで頑張ってもらいたい。私も医学部出身なので、個人としてもできる限りのサポートをしたい」とエールを送る。

戸田さんは、来週から新たな治療に入る。抗がん剤を強くし、今以上の副作用と闘いながらドナーが現れるのを待つ。